

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12381

研究課題名(和文) 重度脳損傷児の生活を支えるケアのための研究方法開発

研究課題名(英文) Development of research methods for improving care to support the lives of the children who have severe brain injuries

研究代表者

亀田 直子 (Naoko, KAMEDA)

摂南大学・看護学部・助教

研究者番号：70737452

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ケア提供者たちの重度脳損傷児へのケア経験を質的に記述すること、重度脳損傷児の生活を支えるケア向上のための研究方法を開発することである。我々の先行研究『重度脳損傷児の生活に関する現象学研究』を継続し、研究方法における課題を克服するための方法を考案し、放課後等デイサービス施設において研究を実施し、ケア提供者のケア経験を開示し、研究方法を振り返った。

前年度応募採択により研究期間1年を残し、2020年～2023年度『超重度の重症心身障害児の生活を支えるケア向上のための研究方法開発』(JSPS科研費20K10926)へと引き継いだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

重度脳損傷児のケア場面でのケア提供者たちの不確かさを含む経験を開示するための方法を探求し記述した。意思を直接確認できない患者へのケアの最適化は世界的課題である。この課題解決のために、我々の結果は客観的データだけでなくケア提供者の経験を熟考すべきであることを強く示唆している。経験を共有しケアに反映させるために必要なことはケア提供者の気づきと話し合いのみである以上、国・病院/施設の経済状況と文化の違いに関わらず容易に実践導入可能である。ケア提供者たちの経験すべてを開示したものではないが、読者は微細な動きを読み解こうとするケア提供者たちの経験を追体験することにより新たな視点を得ることができるだろう。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this study are to describe the caregivers' experiences in the care for children with severe brain injuries and to develop research methods to improve the care that supports the lives of these children. Continuing our previous research "Phenomenological research on the life of a child with severe brain injury", we devised the methods to overcome challenges in our previous research, conducted a research at an after-school care facility which supported the children and their families, and described the caregivers' experiences in the care. And we are in the process of reviewing the methods.

Leaving one year, the research has been taken over "Development of research methods for improving care to support the lives of the children who have severe multiple disabilities" (JSPS KAKENHI Grant Number 20K10926) from 2020 to 2023.

研究分野：看護学

キーワード：脳損傷 意識障害 重症心身障害 子ども ケア ケア提供者 質的研究 看護

## 1. 研究開始当初の背景

子どもの意識障害評価法 (Ashwal, 2004) によると、遷延性意識障害は最重度より昏睡、植物症、最小意識状態、閉じ込め症候群に分類される。本研究において対象とした重度脳損傷児は植物症および最小意識状態にある子どもたちであり、彼らの平均余命は伸びてきている (Ashwal et al., 1994; Monti et al., 2010)。van Erp ら (2014) は植物症の有病率を人口 100,000 人あたり 0.2~6.1 人と推定したが、特に包含基準と診断の検証に関して文献による大幅な相違があり、有病率の数値の信頼性は低く、さらに有病率の数値が広範であることは植物症と最小意識状態の分類に使用される客観的な証拠には限界があることを示唆していると考察している。

Greenhalgh ら (2014) は重複障害をもつ人々やサバイバーにとって、客観的なエビデンス不足が害となっており喫緊の課題であると主張しているが、まさに本研究の対象者は「重複障害をもつ人々」かつ「サバイバー」であると言える。さらに脳損傷の原因の多様性 (例: 頭部外傷、低酸素性脳症、脳腫瘍、脳奇形、代謝異常) および脳損傷を受けた時点での子ども自身の発達段階の違いが、彼らの状態の実質的な変動に寄与する可能性がある (Bigler et al., 2013)。重度脳損傷児に関する客観的なエビデンス不足と彼らの病状の多様性によりケアの標準化は難しく、重度脳損傷児へのケアはケア提供者個人の経験に頼っているのが現状である。

患者の倫理的ケアを最優先にするためにはエビデンスに基づく医療が重要であり、より広範で想像力に富んだ研究が必要である (Greenhalgh ら, 2014)。患者の家族や代理人が意識障害の評価に積極的に関与することが、外傷性脳損傷を受けた患者の評価の誤診率を下げていたとの報告がある (van Erp et al., 2015)。重度脳損傷児たちは重複障害により意思を表現する能力が限られている。また我々は重度脳損傷児たちがどのような経験をしているのかを明らかにし、それを彼らに直接確かめる方策を未だ持っておらず、重度脳損傷児への最適なケアを見出すことは日本のみならず世界中の課題である。

したがって、私たちは重度脳損傷児へのケア場面におけるケア提供者たちの経験を質的に記述することと、ケア提供者たちの経験を開示するための研究方法を開発することが、重度脳損傷児の生活を支えるケア向上につながると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究課題の目的は、ケア提供者たちの重度脳損傷児へのケア経験を質的に記述することと、重度脳損傷児の生活を支えるケア向上のための研究方法を開発することである。

## 3. 研究の方法

### (1) 重症心身障害児者施設での研究

#### 研究対象者

低酸素脳症による重度の重複障害があり施設入所中の 10 歳男児 1 名 (A 君) と A 君のケア提供者 70 名 (実人数: 看護師、医師、理学療法士、家族、ボランティア等) が研究に参加した。

#### データ収集

所属大学、研究参加施設倫理委員会の承認と対象児の家族による代諾、研究参加者の同意を得て研究代表者 (以後 PI: Primary investigator とする) が重度脳損傷児の傍らに居続け、日常的ケアに補助的に参加しながらの観察を 1 回 3 時間 × 21 回行った。医療的・侵襲的ケアには参加せず、参加観察中に調査者が、見て、聞いて、触れて、嗅いで、感じたこと、それらを通して想起されてきたことをフィールドノートに記載した。ケア提供者の重度脳損傷児との関わり、ケア提供者同志の対話、A 君に関する申し送り、診療録の内容等のデータを収集した。参加観察中に記載できなかった事項は、参加観察終了後速やかに記載した。グループインタビューを 1 回 15 分 ~ 45 分間 × 5 回実施した。グループインタビューは Vaughn (1996) らの方法に基づく自由な対話形式とし、A 君の微細な動きや好みに関すること、施設入所時からの 8 年間の体験談や A 君の成長等が話題に上った。グループインタビュー時以外 (参加観察時、休憩時等) にケア提供者から A 君に関する PI との対話が起こることがあった。これらの対話は参加観察記録としてフィールドノートに記載した。

#### 分析

参加観察記録、グループインタビュー逐語録、記録類閲覧データを質的に分析し記述した。

### (2) 放課後等デイサービス施設での研究

#### 研究対象者

重度脳性麻痺による重度の重複障害があり、在宅療養中で、放課後等デイサービス施設を利用している12歳男児(B君)とB君のケア提供者30名(実人数:看護師、保育士、理学療法士、生活支援員)が研究に参加した。

#### データ収集

所属大学倫理委員会による承認と研究参加施設管理者の承諾、B君の家族による代諾と参加者の同意を得て実施した。B君の状態とB君のケアに関する自記式の質問紙調査、重度心身障害児施設での研究におけるA君の時と同様のケアに補助的に参加しながらの観察を1回3時間×3回実施し、フィールドノートに記載した。施設開所時間外にグループインタビューを80分×2回実施した。グループインタビューはVaughn(1996)らの方法に基づく自由な対話形式とし、B君の普段の様子、ケア提供者たちがB君に出会った時からの成長、PIが参加していた場面が話題に上り、特にPIが参加していた場面を重点的に振り返り、その場面でどのように感じたのか、B君の動きをどのように読み解いたのかを共有した。参加観察とグループインタビューは2台のICレコーダーにより録音し、逐語録化した。

#### 分析

参加観察時の録音データの逐語録、フィールドノート、グループインタビュー逐語録を質的に分析し、記述した。質問紙によるデータは補助的に用いた。

#### (3) 研究方法開発のための取り組み

研究代表者の先行研究『重度脳損傷児の生活に関する現象学的研究』の方法における課題を明確化し、課題を克服するための方法を考案し、放課後等デイサービス施設において実施し、振り返った。

質的研究、特に一事例研究の正当性に関する論考を進めた。

## 4. 研究成果

本研究課題は前年度応募採択により研究期間を1年残して、2020年度から『超重度の重症心身障害児の生活を支えるケア向上のための研究方法開発』(科研費研究20K10926)へと引き継がれたため、2019年度までの研究成果を報告する。

#### (1) ケア提供者たちの重度脳損傷児へのケア経験の記述

##### 重症心身障害児者施設での研究

10歳重度脳損傷児A君とA君のケア提供者70名(家族、看護師、生活支援員、医師、理学療法士、教諭、学校看護師等)が研究に参加した。研究参加者数は実人数であり、参加観察のみ40名、グループインタビューのみ9名、両方への参加者21名であり、研究参加辞退者は無かった。

A君は0歳4か月時に起こった心肺停止により重度の脳損傷となり、人工呼吸器装着中、低体温で常に保温を要し、聴性脳幹反応(音に対する脳波の変化)はなかった。普段は数ミリのまぶたの動きと頸部の動きしか認められなかったが、ケア提供者が酸素飽和度モニターを隠した際にA君の眼球等の動きがあり、「モニターはお友達?」と声をかけた場面でA君の明らかな瞬きが繰り返し起こった。A君の明らかな瞬きが繰り返し起こったのは、合計63時間の参加観察中にこの一度だけであった。

A君の微細な動きを読み解こうとするケア提供者たちの経験の構造として4つのテーマが浮かび上がった(次ページ:図1参照)。ケア提供者たちはA君の身体状況と彼の微細な動きを見出し、熟考し、その中でA君の微細な動きに関するケア提供者の不確かな感覚に気づき、酸素飽和度モニターを隠すことなどによってA君の複数の微細な動きをさらに読み解こうとケアを発展させていた。sharingとは、ケア提供者たちの不確かな感覚を含む経験・解釈などを共有し蓄積することであった。sharingはテーマ~にとって不可欠であり、『不確かな感覚』を『より確かな感覚』へと移行させる役割を持つ重要な概念であると推察された。

本研究が提示したこれら4つのテーマは重度脳損傷児の微細な動きを読み解く際のアセスメントやガイドと成り得る。さらに重度脳損傷児の微細な動きを読み解くことにより役立つと考えられるSharingへの3つのアプローチ、ケア提供者の経験を熟考するためにSharingを行うこと、複数のケア提供者たちのA君の微細な動きに関する様々な感覚(不確かな感覚とその不確かな感覚が確かな感覚へとシフトするような)のSharingと解釈を行うこと、これらの解釈を将来活用するためにケア提供者自身の経験として蓄えるためのSharingを行うことを提案した(Kameda & Suzuki, 2018)。

Belk(2010)はSharingの理論分析を行い、物を介さない経験のみのsharingの探求が希求されていると述べている。我々のSharingに関する結果はこの経験のみのSharingの一例であると言える。

意思を直接確認できない患者へのケアの最適化は世界的課題である。この課題解決のために、我々の結果は、客観的データだけでなくケア提供者の経験を熟考すべきであることを強く示唆

している。sharing に必要なことはケア提供者の気づきと話し合いのみである以上、国・病院 / 施設の経済状況と文化の違いに関わらず容易に実践導入可能である。

本研究結果はケア提供者たちの経験のすべてを開示したものではないが、読者は微細な動きを読み解こうとするケア提供者たちの経験を追体験することにより、新たな視点を得ることができるだろう。

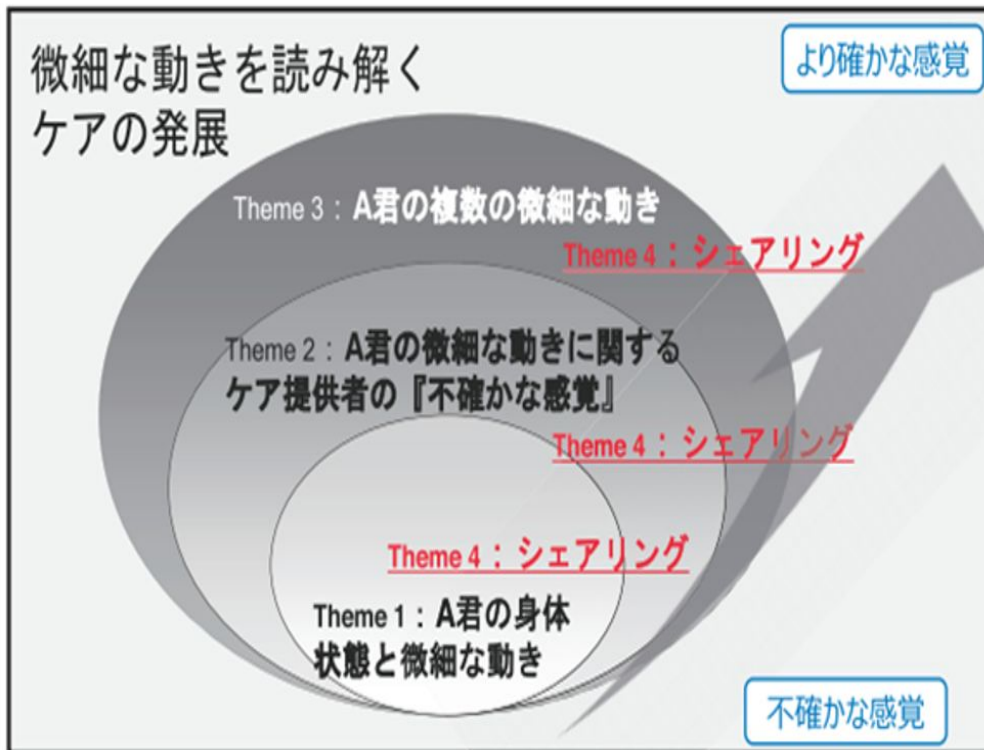


図 1 : 重度脳損傷児 A 君の微細な動きを読み解こうとするケア提供者たちの生きられた経験  
[京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要:健康科学:health science(2018) 13: p.33 に掲載]

#### 放課後等デイサービス施設での研究

12 歳男児と B 君のケア提供者 30 名 (実人数: 看護師、保育士、理学療法士、生活支援員) が研究に参加した。参加観察への参加者は延べ 21 名、2 回のグループインタビューへ参加者は延べ 14 名であり、2 回実施した質問紙には 35 通の回答があった。B 君は重度脳性麻痺による重複障害があり寝返り不可、気管切開術を受けており、胃ろうからの経管栄養だが、ごく少量のペースト食を介助により食べることができる。手足の動き、頸部の動きや「うー」などの発声が時にあるが言葉やゼスチャーでのコミュニケーションはできなかった。

B 君が咳によってケア提供者を呼んでいる可能性を複数のケア提供者たちが捉えていることが質問紙から把握でき、参加観察中にその場面を確認できた。グループインタビューでも B 君が咳でケア提供者を呼んでいる可能性について語られ、その時の参加者全員で共有できた。さらにグループインタビューでは、これまでの B 君との出来事や B 君の成長、参加観察中の様子 (いつもはみんなで活動する時間には寝ているのに、大きな絵本を読む活動を行ったその日は起きていて、絵本との間に他の子どもが遮るように入った時に腕を曲げた場面等) とそれらの場面でケア提供者たちがどのように感じたのか、動きをどのように読み解いたのか等の経験を共有し、話し合うことができた。これらの Sharing の結果、2 回目のグループインタビューの最後には、ケア提供者たち自ら B 君が咳で呼んでいるという (私たちの) 思い込みをやめて、もっと観察して、B 君がより身体への負担が少ない方法で私たちを呼べるようにしていこうという新たなケア方針を見出していた。この経過を The 24<sup>th</sup> East Asian Forum of Nursing Scholars 2021 にて発表した。

#### (2) 研究方法開発に関する研究成果

重度心身障害児者施設で実施した研究では先入観を持たずに A 君のありのままの生活とそこで行われているケアを観察することに重点を置いたことや、研究参加によるケアスケジュールへの影響を最小限にするためにグループインタビューの時間が 1 回 15 分となったこと等から、参加観察データを主データ、グループインタビューデータを補助的データとして分析を進めた。当初施設担当者と予測していた研究参加者は 10~15 名であったが、A 君の生活に関わるすべての事象を観察し、研究参加辞退者が居なかったことから研究参加者は実人数で 70 名となり、ありのままの生活を観察できた一方で、データは膨大かつ複雑となり、van Manen の現象学的解釈学的方法 (1990) に基づく分析にはかなりの時間を要した。

現象学的研究として先入観を排除しありのままを記述することと、ケアに役立つ研究成果としてより効果的な記述に繋げることの両立を目指し、参加観察とグループインタビューに加えて質問紙調査を補助的に用いる新たな研究方法を開発中である。本報告書「3. 研究の方法」で提示した放課後等デイサービス施設利用者であるB君とB君のケア提供者の協力を得て実施した研究におけるデータ収集に関する1つの試みとその結果をThe 6<sup>th</sup> World Academy of Nursing Science 2020で発表した。

放課後等デイサービス施設のケア提供者たちが、本研究の質問紙調査、参加観察、グループインタビューへの参加を通して、参加者自身の経験を振り返り、お互いの経験を共有し、共同で解釈するSharing (Kameda & Suzuki, 2018)を行った結果、ケア提供者たち自らB君の可能性に気づき、新たなケア目標が設定されたことを先に述べた。B君はA君よりも大きな動きが時に認められること、重症心身障害児者施設と放課後等デイサービス施設では設置主体、人員配置、部屋の広さ等の環境面の違い等があり、研究方法のみを比較することはできない。さらにB君の重複障害は重度ではあるが、本研究課題が当初対象としていた重度脳損傷(植物症、最小意識状態)に分類される状態にはなかった。しかしながらB君とB君のケア提供者の協力を得て実施した我々の研究方法は、重度脳損傷児を対象とした研究にも応用可能であると考えている。

次に質的研究、事例研究に関する論考による成果について述べる。まず看護師が経験している世界に焦点を当てる。看護におけるエキスパートの実践者の特徴の一つは、「質的な違いについての区別(graded qualitative distinctions)」(Benner, 2001[1984] pp.4-5 / 井部監訳, 2005, pp.3-5)であり、「エキスパート」の段階の看護師は、「臨床問題を認識する瞬間に」「既に診断をしてしまっている」ことにある。「初心者」や「新人」「一人前」の段階の看護師とは経験している世界が質的に異なっていると考えられる。実践者の経験の違いによって事象の現われ方が異なり、その現れ方と実践とが緊密に関係しているので、事象の現われ方の基本的構造ならびに現われている事象と実践との基本的関係が重要であると考えた。そこでメルロ＝ポンティの思想に基づき、実践(行為)そのものではなく、実践に関わる事象の「現われ」、つまり、その「意味」の成立の基本的な事態を考察した。結果、「意味」を成立させる基本的な事態として「側面的関係」が明らかとなった。また、現れている事象と実践との関係は「動機づけ」であり、「動機づけ」も「運動の意味」を介して成立していると考えられた。詳細は「事象の現れから実践を考える 看護実践の語りに基づいて」(家高, 2018)を参照されたい。

次に『「転用可能性(transferability)」再考「ケアの意味を見つめる事例研究」のために(前編)』(家高, 2019)と『「ケアの意味を見つめる事例研究」の質評価の視点』(山本 & 家高, 2018)より、事例研究が目指すべきゴールについて考えたい。看護のみならずケアのそれぞれの実践は個別性が非常に高い場合が多く、個別の事例で得られた知見はそのままでは他の事例にあてはめることは困難である。いわゆる「一般化可能性」が「ケアの意味を見つめる事例研究」において問題になる。このような問題に対してリンカンらが提起した概念「転用可能性(transferability)」(Lincoln & Guba, 1985, pp.122-125)がしばしば言及されてきた。リンカンらによれば、転用される元の文脈と転用先の文脈の適合(fittingness)の程度に転用可能性は依存している。そして、転用可能性が成立するためには、その事例についての「厚い記述」が不可欠である(Lincoln & Guba, 1985, p.125, 359)。個別事例を読んで読者が自ら自身の事例に適用(転用)することはしばしば生じるが、この適用(転用)は読者に任されている(Greene, 1990, pp.236-237)。それゆえに、事例研究者(事例執筆者)にとって「知識の転用(transfer)は、依然として理解されがたい」ということになるだろう(Stake, 2005, p.456)。ところで、個別の一事例でも、多くの他人に役立つことが指摘されている(河合, 2013[1976])。このような場合に、その個別事例は何らかの「普遍性」をもつのではないかと河合(2013[1976] p.210)は主張する。また文化人類学者のギアツは事例の中において(ある種の)「普遍」が見いだされると主張している(Geertz, 2000[1973] p.26 / 吉田、柳川、中牧、板橋訳, 1987, p.44)。また山本と家高(2018)は「ケアの意味を見つめる事例研究」の質評価の視点として、その事例研究は、看護にとって重要な実践に焦点を当てているか? その事例研究は看護実践の本質的な意味を的確に捉えているか? その事例研究では、読者が生き生きと追体験できる形で実践の展開の全体像が十分詳細に書かれているか? その事例研究によって読者との間主観的な共通理解が生まれ、読者の知覚の更新・拡張が起きるかの4つを挙げ、特に「触発性Inspirability」と名付けている。

これらの論考によって明確化した問いを以下に示す。エキスパートの経験世界を事例研究が開示したとき、あるいは我々の研究が示したようなケア提供者間でのSharingが起こった時、どのように「転用可能性」や「普遍」へと繋がり、それぞれのケア提供者の実践へと活かされていくのだろうか。言い換えると間主観的な共通理解が研究成果と読者あるいはケア提供者間のSharingによってどのように生まれ、ケア実践へと繋がる知覚の更新・拡張が起きるのだろうか。そしてさらにその先に「一般化可能性」があるのだろうか。事例研究は「一般化可能性」を目指すべきなのだろうか。これらの問いにも引き続き取り組んでいきたい。

これ以後の研究成果は後継課題『超重度の重症心身障害児の生活を支えるケア向上のための研究方法開発』(科研費研究20K10926)の研究成果報告書で報告したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Naoko Kameda, Hiroshi Ietaka, Tomomi Ikeda	4. 巻 33
2. 論文標題 The Significance of Discussing Caregivers' Experiences Which Were Not Treated Enough in the Medical Situation Due to Their Subjectivity: In the Process of Seeking How Caregivers Read Severely Brain Injured Children's Own Will/Thought	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Brain Injury	6. 最初と最後の頁 106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 家高洋	4. 巻 52(4)
2. 論文標題 「転用可能性(transferability)」再考：「ケアの意味を見つめる事例研究」のために(前編)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 看護研究	6. 最初と最後の頁 312-318
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 家高洋	4. 巻 52(5)
2. 論文標題 「転用可能性(transferability)」再考：「ケアの意味を見つめる事例研究」のために(後編)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 看護研究	6. 最初と最後の頁 390-397
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山本 則子、家高 洋	4. 巻 51
2. 論文標題 特集 ケアの意味を見つめる事例研究 現場発看護学の構築に向けて 8.「ケアの意味を見つめる事例研究」の質評価の視点	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 看護研究	6. 最初と最後の頁 466～471
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.1681201547	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤 凡、山本 則子、家高 洋	4. 巻 51
2. 論文標題 特集 ケアの意味を見つめる事例研究 現場発看護学の構築に向けて 7.「ケアの意味を見つめる事例研究」の学術性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 看護研究	6. 最初と最後の頁 456 ~ 465
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1681201546	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kameda Naoko、Suzuki Machiko	4. 巻 27
2. 論文標題 Caregivers' lived experience in trying to read slight movements in a child with severe brain injury: A phenomenological study	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Clinical Nursing	6. 最初と最後の頁 e1202 ~ e1213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jocn.14255	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 家高 洋	4. 巻 31
2. 論文標題 事象の現れ方から実践を考える ~看護実践の語りに基づいて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東北医科薬科大学 教養教育関係論集	6. 最初と最後の頁 15-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Naoko Kameda, Hiroshi Ietaka, Tomomi Ikeda
2. 発表標題 Research Methods to Contribute to Improving Lives of Children Whose Movements Are Not Easy to Be Read by Caregivers Due to Their Severe Disabilities: Collaboration with a 12-Year Old Child Having Severe Cerebral Palsy and Caregivers of a Facility
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Naoko KAMEDA, Tomomi IKEDA, Hiroshi IETAKA
2. 発表標題 The significance of discussing caregivers' experiences which were not treated enough in the medical situation due to their subjectivity: In the process of seeking how caregivers read severely brain injured children's own will/thought
3. 学会等名 The 13th World Congress on Brain Injury (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 家高 洋
2. 発表標題 教育講演「現象学への招待 ～看護実践を捉え直す見方」
3. 学会等名 第20回日本救急医学会中部地方会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松葉 祥一、本郷 均、廣瀬 浩司編（分担執筆：家高 洋）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 12/430
3. 書名 メルロ＝ポンティ読本 第 部 講義－思想の生成の場 『感覚的世界と表現の世界』－「表現」の概念から知覚・運動・身体図式を捉え直す	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>摂南大学研究者総覧  <a href="http://gyoseki.setsunan.ac.jp/html/100001237_ja.html">http://gyoseki.setsunan.ac.jp/html/100001237_ja.html</a>  researchmap  <a href="https://researchmap.jp/n-kameda">https://researchmap.jp/n-kameda</a>  ORCID  <a href="https://orcid.org/0000-0002-3171-0676">https://orcid.org/0000-0002-3171-0676</a>  researchgate  <a href="https://www.researchgate.net/profile/Naoko_Kameda">https://www.researchgate.net/profile/Naoko_Kameda</a></p>
--



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	家高 洋  (Hiroshi IETAKA)  (70456937)	東北医科薬科大学・教養教育センター・教授    (31305)	
研究分担者	池田 友美  (Tomomi IKEDA)  (70434959)	摂南大学・看護学部・教授    (34428)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関